

令和七年度入学試験問題

国語

問題用紙

〔一〕 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えなさい。

〈痛み〉は、人の存在が(ア)ソコなわれつつあるとき、その危機の徴候もしくは信号としてその人自身に感受されるものであろう。人の身体に、あるいは人の心に、なにかただならぬ事態が発生しているとき、人は〈痛み〉に襲われる。〈痛み〉については、それが発生するメカニズムについて、さまざまな分析がなされていることとおもう。神経医学・生理学を中心に。

ここでわたしが考えてみたいのは、〈痛み〉という現象が人にとってもつ意味についてである。

〈痛み〉は、A大きく分けて二つのかたちでわたしたちを襲う。ずきずき^{うず}疼くというかたちで、そしてぎりぎり刺すというかたちで。いつてみれば、「疼き」と「激痛」である。

身体的なものであれ心的なものであれ、過去に受けた深い傷や痛手は、いつまでも消え去ってくれない。傷や痛手は過去のある時に受けたものであっても、なかなか過去になつてくれない。それは、いくら時間を経ても、ふとしたはずみに首をもたげ、よみがえってくる。たとえば何かの情景を眼にしたとき、あるメロディにふれたとき、あるいはちよつとした湿度や気圧の変化をきっかけに。それはいつまでも過去のものとなつてくれず、現在を蝕^{むし}む影として、いつもいまここに居すわっている。いつてみればそれは、過去になつてくれない過去、人がいつまでも引きずる過去である。そして、そういう「疼き」と向き合うなかで、〈わたし〉というものが形成される。

これに対して、「激痛」は、そもそもそういう向き合いそのものを不可能にする。「激痛」は、人を時間の一点、空間の一点に閉じ込めるからである。痛む人の意識はその痛みの瞬間に貼りつけられて、そこから離脱することができない。痛むこの「いま」からその先へ、あるいは前へと想いを漂わせることができない。いいかえると、烈しい痛みのなかで、人は過去の想い出に浸ることはできないし、遠い未来に、いや近い未来にさえ、想いをはせることができない。時が、いつてみれば「庭」を失って、「点」になる。苦痛のなかで、人は「いま」に閉じ込められるのだ。

「激痛」はおなじように、人を「ここ」へと閉じ込めもする。身体が、痛むその一点へと内向して、もはやまわりの世界へとのびやかに開かれない。他人の言葉や葉を懐深く迎え入れたり、他人の心境に遠く想いをはせる余裕もなくなる。

「激痛」の緩和ということが人に必要なのも、危機の徴候であるはずの〈痛み〉が高じて、こんどは人の存在そのものを(イ)ホウカイさせかねないところま

で来ているからだ、とさしあたつては言える。が、さらにこれがなぜかという点、わたしは、「激痛」が人を「いま」「ここ」という一点に閉じ込めるといふ点にあるようにおもう。

「いま」と「ここ」に人が貼りつけられる、閉じ込められるというのは、たとえば過ぎし日の想い出に浸ること、過去のじぶんの行為を悔いることすらできなくなるということである。あるいは、将来の夢を見ること、何かの希望を抱くこと、何かに祈ることが不可能になるということである。つまり、何かをおもうという、人としてのいちばん基本的なとなみが不可能になるということである。それは、人としての《尊厳》が、あるいはその前提条件となるものが、決定的に(ウ)オカされるということである。

激痛が人を襲うとき、「苦痛があらゆる場所を占め、人はもはや〈わたし〉ではなくなる。存在するのは苦痛のみである」。そうフランスの精神科医、D・アンジューは書いている。人は激痛のなかで〈痛み〉そのものになつてしまい、じぶんというものの距離がとれなくなる。人の存在がうんと奥まり、(エ)チヂこまつて、個人が人として孤立してしまう。だれも代わりに痛んでくれるわけはなく、人はただひたすらそれを独りで耐えぬくしかない。

I、西洋の古人はBシンパシーというものを道徳や社会感情の基本として重く見たとおもわれる。シンパシーの原意は「苦しみ(バトス)をとともにする」ということである。苦しみというものはその人が感じ、耐えるしかないもので、他のだれにも代わってもらえないものであるからこそ、想像力を強く(オ)カンキしないとそれに届かないものだ。そういえば、味もまた、目の前にひろがる光景や、あたりを包む音、あたりに漂う香りとかと違つて他人と共有しにくいもので、毎日おなじような献立であつてもつくる人は食べる人にそのたび「おいしい?」と尋ねる。つい、いま他人がどう感じているかを訊きたくなるのだ。だからだろう、人類は一緒に食事をする習慣というのを大切にしてきた。他人に想いをはせる訓練として。

〈痛み〉は人を決定的に孤立させるものであるということ、その意味で、C〈痛み〉は酷いものである。痛さそのものによつて、ではない。それが人を孤立させるからだ。痛みについて語るとき、この点だけはよくよく心にとめておかねばならないようにおもう。

(鷲田清一「痛みの文化?」『おとなの背中』より、一部改変。)

問1 傍線部ア、オのカタカナを漢字に直して書きなさい。

(ア) ソコなわれ (イ) ホウカイ (ウ) オカされる (エ) チヂこまつて (オ) カンキ

問2 傍線部A「大きく分けて二つのかたち」とあるが、それぞれどのような特徴を持つものとして説明されているか。二つの違いが分かるように三〇字以上五〇字以内で書きなさい。

問3

I

に当てはまる語句として最も適当なものを、次の①～⑤から一つ選び、記号で書きなさい。

- ① だからこそ
- ② それなのに
- ③ 一方で
- ④ なぜなら
- ⑤ ところが

問4 傍線部B「シンパシー」とあるが、本文におけるシンパシーに関する説明について、最も適切なものを次の①～⑤から一つ選び、記号で書きなさい。

- ① 人は他者の痛みを完全に理解することはできないが、シンパシーによってその人の苦しみを和らげることができる。
- ② シンパシーは人の痛みに関する感情を共有する能力であり、それによって人は孤立から救われる。
- ③ シンパシーは痛みを共有にできる感情であるため、西洋では道徳や社会感情の基本とされた。
- ④ シンパシーは「苦しみをともにする」という原意を持つが、他者の痛みを完全に理解することはできない。
- ⑤ シンパシーは他者への思いやりを示す感情であり、それによって人は痛みを分かち合うことができる。

問5 傍線部C「痛み」は酷いものである。」とあるが、筆者がそのように言う理由を、六〇字以上八〇字以内で書きなさい。

問6 本文の内容について、最も適切なものを次の①～⑤から一つ選び、記号で書きなさい。

- ① 〈痛み〉の種類を区別し、それぞれの症状と治療法を説明している。
- ② 〈痛み〉がもたらす心理的影響を医学的な見地から分析している。
- ③ 〈痛み〉の性質を定義し、その社会的な意味を歴史的に考察している。
- ④ 〈痛み〉が人間存在に与える影響を、時間と空間の観点から論じている。
- ⑤ 〈痛み〉への対処法を、具体的な事例を挙げながら提案している。

(二) 次の文章を読んで、後の問い(問1～5)に答えなさい。

夏の日の事である。門前で遊んでいると、遠くから埃をあげて、まっしぐらに白馬をかけさせて来る人があった。西洋の(ア)シユリヨウの絵に見るような黒い鳥打帽子をかぶり、霜降の乗馬服に足ごしらえもすっかり本式なのが、鞭は(イ)タヅナと共に手に持って、心持前屈みの姿勢をくずさず、振向きもせずに通り返した。僅か一瞬間の事であったが、子供の眼には仰ぎ見る馬上の姿が、天かけるように聳えて高く見えたのである。

「いいなあ。」

子供は一せいに感心して、見る見る町角に消えて行く白馬の行方を見送った。

「おいらも今にあんな馬に乗つかるんだ。」

一番頓狂な乾物屋の子は、ありあわせの竹の棒にまたがって、そこいら中をかけずり廻った。

「馬鹿、てめえみたいな鼻つたらしが馬になんか乗れるもんかい。あの人なんて百円の月給取なんだぞ。」

年かさの車屋の子は、はしやぎ切って汗を流している奴を叱りつけた。

「百円？ おっかねえ、おっかねえ。」

乾物屋の子は目をまあるくして、おどけた顔を突出した。

「百円の月給だつてさ。」

周囲の者も口々に驚嘆の声を発した。驚くほかに何らの考えも浮かばないほど、当時の子供の頭には、百円という金が大金だった。口でこそ百円とひと口にいうけれど、その分量も値うちも(ウ)トウテイ想像出来なかった。

その連中にまじって、自分は声こそ出さなかったが、心ひそかに驚嘆していた。自分も大きくなったら、あんな立派な馬に乗りたいが、百円の月給取にならなければ駄目なのかと思うとがっかりした。いったい世の中に、どういう人が百円なんていう莫大もない月給をとるのだろう、大將かしら、大臣かしら、いろいろ考えたがわからなかった。話に聞けば自分の父も、自分が生まれない先に役人をしていた頃は、馬に乗って役所に通ったそうだが、どうも百円の月給取ではなさそうに思われる。しかし万一、父が百円の月給取だったら、どんなに嬉しいことだろうと、その事ばかり考えていた。

夕方になって、「蛙が鳴いたからかえろ。」と我がちにいいながら、おなかをすかしてうちに帰ったが、自分はすぐに母のところへ飛んで行って、父の月給がいくらであるかきいた。

「なぜそんな事をきくのです。」

「なぜでもないけれど、百円？」

母は黙って自分の顔を見ていたが、

「そんな事をきくものではありません。」

といったばかりで取合わなかった。金銭のことを口にするのは卑しいことだと、おちぶれ士族の娘である母はかたく信じていて、平生から子供たちにいいきかせてあった。

それっきり自分は口をつぐんでしまったが、たった一瞬間にして通り過ぎただけの白馬鞍上の紳士の姿は、一生涯忘れられないほど爽かに眼に残った。どうかして、自分も大人になったら、偉い人になって百円の月給取になろうと、あたかも天下を望むような大きな事として考えていた。百円の金高は、A広大無辺に思われたのである。

ある時、母方の叔父が来て、自分はその膝の間で遊んでいたが、ふと思い出してきいて見た。

「叔父さんはうちのお父さんの月給いくらだか知ってる？」

叔父は不思議そうな顔をして見おろしていたが、目尻に微笑が浮かんだので、自分は安心して重ねてきいた。

「百円よりも多い？ 少ない？」

「多いとも、倍も三倍も多いだろう。」

自分は嬉しさに顔が紅くなる位だったが、あまり無雑作に、かつ意外な返事だったので、半信半疑だった。

「それじゃあ叔父さんは？」

「叔父さんか。叔父さんは百円の半分のまた半分位かな。」

そういつて太い声で笑った。

父の月給が百円より多いらしく思われて来た事は、やがて自分も白い馬に乗ることが出来そうな気持を起こさせた。嬉しくて堪らなかった。そうして、そういういい返事をしてくれた叔父が、やはり偉い人に思われた。叔父さんの月給が、百円の半分のまた半分なんていうのは嘘にちがいない。嘘だからこそ後で笑ったのだと思った。

その馬上の紳士の姿は、二度と見たことがないが、それから三十年たって、自分は百円の月給取になった。その時、自分は馬に乗るところでなく、一家を構える力もなく、下宿屋の二階にくすぶって、常に懐中の乏しさに（エ）ナンジユウし、朝夕満員の電車に鰯の罐詰の姿をして乗らねばならぬ身の上だった。もちろん、物価が驚くほど高くなったことと、貨幣の値打の変わったことを考えに入れなければならないが、しかし子供の時に考えた百円は、今日の壺万円よ

りも拾万円よりも百万円よりも莫大なものであった。

上に引合に出した叔父についても、英雄崇拜の思い出がある。叔父は慶応義塾を出て、郵船会社に勤めていた。海上勤務の頃は、事務長をしていたのか、あるいはその下役の事務員かは知らないが、歐洲航路の船に乗って、しばしば珍しいおみやげを持って来てくれた。六尺近い大男で、日本人には類のない白皙の面にやや赤味を帯びた口髭をはやしていた。それが金筋の入った正服を着て、当時はまだ珍しかったバナナだの、パイナップルだのの籠をさげて帰って来る姿は、自分の異国趣味を十分満足させた。文明開化という言葉が流行し、何の品でも質のいい物は上等（オ）ハクライと唱えた時代だから、西洋といえど何よりも美しい国におもわれた。自分は叔父にせびっては、ヨーロッパの港々の話をきかしてもらった。

しかし叔父を崇拜するのは、単にそのためばかりではなかった。それよりも叔父の投げる小石が子供の眼にははつきりと距離のはかれないほど遠くまで飛んで行くことに敬服していたのだ。

叔父の家は木挽町にあった。二階一室に階下が三室位の小さな家で、自分から見れば祖母にあたる母親と、自分から見ればやはり叔父で、まだ高等小学校に通う位の年配だったから、豆叔父さんと呼んでいた叔父の弟と、台所を働く婆やとで暮らしていた。涙脆く、金銭にしまりのない、お調子に乗りやすい性質を多分にうけついで自分は、まぎれもなく母方の血を引いているので、子供の時からこの祖母のごひいきだった。俐巧な兄は父方の祖母のほめ者だったが、母方の祖母は自分をつかまえて、おまえは兄さんよりもきつと偉くなるよ、と無責任なことをいって可愛がってくれた。時々そのお祖母さんの寝顔が狸に見えて、夜中に泣き出すこともあったけれど、年中とまりがけで遊びに行っていた。二階の縁側に置いてある藤椅子の上に足を投出して、目の前の川を漕ぎ下るボートを見るのが楽しみだった。夕方叔父が会社から帰って来る頃は、祖母に手を引かれて河岸に出て待っていた。大男の叔父の姿が見えると、自分は祖母の手を振切って、半丁ばかりかけていって、叔父の手にすがりつくのであった。

この甥を喜ばせるために、叔父は小石を拾って川水の上に遠く投げて見せた。真似をして投げる豆叔父さんの石は川の真中ぐらいで水に落ち、更にその真似をする自分のは、足もとの浅瀬に水音を立てるのであったが、叔父のは向こうの海軍大学の石垣にぶつかるのであった。その向う岸は幼い者にはひどく遠方に見えた。早く叔父さんのように大きくなりたいなあと、つくづく感じたものであった。川を越えて石を投げ得る人は、あらゆる事の勇者であるような気がしたのである。叔父はその後友人の負債の責任をしょって東京にいられなくなり、各地を流転したあげくに、殆ど誰も知らないような状態で、北海道で死んでしまった。

つい近頃往年の木挽町の河岸をぶらついた事があった。町の様子にも変りはなく、向う岸の海軍大学の景色も昔通りだった。だが甚しく意外に思ったのは、川幅の至って狭いことだった。子供の時に見た大人の偉さと同じく、大人になって見ると大したものではなかったのである。

祖母も叔父も豆叔父も今は世になき人であるが、叔父の住んでいた家は以前そのまま残っていて、知らない人の表札がかかっていた。去るに忍びない心持もあ

つたが、幸い付近の人影も見えないので、足もとの小石を拾って向う岸まで投げて見た。別段力を入れないでも、無雑作に石垣に届くばかりでなく、樹木の茂った校庭にも楽々と投げこむことが出来た。二つ三つ投げ、最後のひとつをもう一度石垣に叩きつけた時、

「誰だッ。」

と校庭からどなって、灌木のしげみを押分けて顔を出した人があった。自分ははしたない所為を恥じて一散に逃出した。

ついに自分も大人になった。しかし、あれほどまでに崇拜した大人が、いかに馬鹿馬鹿しいものであるかをとうに知ってしまった。あらゆるものに驚嘆し、すべてほんとにある物よりも、大きく、立派に美しく見る子供の眼を失ったことを悲しみ、永い間、その子供の頃の思い出以外のものは、心から自分を喜ばせることが出来なかった位落胆した。

言葉をかえていえば、盲目的な憧れの美しさに酔った自分をなつかしみ、A実際の世の中の美しくない事に悲観し、著しく懷疑的になったのであった。

ところが最近になって、自分には更に新しい眼が開かれて来た。それはB完全に発達した大人の眼である。徒らに物事に驚かず、よきものと悪しきものの區別を知り、あらゆるものの価値を正當に批判し、しかもなお熱情をもつてよきものを喜ぶ大人の眼が、無批判の憧憬讀美を事としていた單純極まるC子供の眼にまさる喜びを持つことを悟つて来た。

それは物の本体を見極める眼である。価値批判の眼である。単に生々しい色彩に眼を眩まされるのではなく、光と共に陰影を見る眼である。単に事物の分量に驚くのではなく、その質を吟味する眼である。子供の眼が夢を見る眼ならば、これは実在を見る眼である。それが幻影を見る眼ならば、これは現実を見る眼である。深く、鋭く、冷静に、世態人情の一切にまで視線の及ぶ眼である。

確かに線香花火のように容易に熱し、たちまち火花を散らす感激はなくなったが、同時にまた贗物にのぼせ上がり、くわせ物にだまされることのなくなったのが、大人の眼の効果である。

(水上瀧太郎「大人の眼と子供の眼」『日本児童文学名作集下』より、一部改変。)

問1 傍線部ア、オのカタカナを漢字に直して書きなさい。

- (ア) シュリヨウ (イ) タヅナ (ウ) トウテイ (エ) ナンジュウ (オ) ハクライ

問2 傍線部A「広大無辺」の意味を書きなさい。

問3 本文の記述として最も適当なものを、次の①～⑤から一つ選び、記号で書きなさい。

- ① 筆者は百円の月給について母に尋ねた際、金銭の話題を避けようとする母の態度に初めて気付き、おちぶれ士族の誇りを理解した。
- ② 子供時代の「川幅」と大人になって見た「川幅」の違いは、本質的な価値は変わらないのに、人の認識が変化することの象徴として描かれている。
- ③ 叔父の投げた石が川を越えて向こう岸まで届いたという記憶は、明治以降の近代化における西洋文明への憧憬を表現したものである。
- ④ 筆者が世間の出来事を記録することは好むが、その是非を論じないのは、自身の思想や趣味が過去の時代に属していることを自覚しているためである。
- ⑤ 筆者が子供の頃想像した百円の価値は、物価の高騰や貨幣価値の変化を考慮しても、現在の拾万円よりも大きな価値として捉えられていた。

問4 傍線部A「実際の世の中の美しくない事に悲観し、著しく懐疑的になった」とあるが、そのように考えるようになった理由を、本文に沿って四〇文字以上六〇文字以内で書きなさい。

問5 筆者は、なぜ傍線部B「完全に発達した大人の眼」が傍線部C「子供の眼」より優れていると考えるようになったのか。本文の内容を踏まえて八〇文字以上一〇〇文字以内で書きなさい。

解答用紙

--

3

こまっ
て
才

ア	
な	
わ	
れ	
イ	
ウ	
さ	
れ	
る	
エ	
こ	
ま	
っ	
て	
オ	

[illegible][illegible]